

～今後の美術館とまちづくりのあり方～

7 大学からまちへ、まちから人のつながりへ



長田 謙一
NAGATA Kenichi

首都大学東京システムデザイン学部
前千葉大学教育学部/教授

いまや全国随所に、大学がかかわったアートプロジェクトが展開され、また大学と地域が連携する各種の企画も進められている。時代は、次の段階に進もうとしているといっただけであろう。それらの先駆けとなった学生主導のアートプロジェクトの進化の秘訣とは…。

人々の生活の場に進出するアート

日本全国どこへいってもシャッター街といわれるうらぶれた風景が、まちのかつての賑わいの中心域を蝕んでいき始めたのは四半世紀以上も前になる。その変容を追いかけけるようにして、アートの風景に著しい変化が生じ始めたのも、1980年代の終わり頃からと言えよう。

1987年、ドイツの美しい地方都市ミュンスターで、1977年以来10年間隔で開催される「ミュンスター彫刻プロジェクト」の第2回展が開催された。まちの中心部、郊外、大学キャンパスなどの随所に、旧来の彫刻の範疇を大きく超えた「彫刻」が展開された。

訪れた人は美術館と駅のプロジェクトセンターでマップを手に入れ、まち中をレンタサイクルで走り回る。個々の作品を見て回る行為へと誘われた来訪者は、着いた地点でもその作品を探しまわる活動が求められる。その結果、「作品」の背景に沈んで捨象されねばならないまちや野原などの現実の生活空間が、新鮮な眼差しのもとに浮かび上がり屹立するのを経験し始める。この見る人の動き回り探索する能動的な活動は、作品と周囲の現実の双方を通常の見え方とは異なる相貌のもとに描く。言い換えれば、その活動を通してアートが、現実の様々な問題への通常とは異なるアプローチの回路を垣間見せる。アートは見る人の能動的な「参加」を誘い、そこに新

しい経験やつながりを生成せしめるカタリスト（触媒）となる可能性を開き始めた。

日本においても、生活の場のただなかにアートが展開する可能性が熟し、一つの画期を迎えようとしていた。21世紀に入り、燎原の火のように、まちの中、田野の中、人々の中でそれぞれをつなぎながら展開するアートが始まり、一気に広がっていった。まちや地域で展開するアートプロジェクトやイベントは、今や一つのメインストリームとなりつつある。このことは、社会の中でアートが占める位置や役割に大きな変容が生じつつあることを物語っている。

美術館に収められた美術を超え、まちに巨大なアート作品を設置するだけの旧来の「パブリックアート」をも超えて、アートは人々の現実の生活の場で、それを作る側や見る側の双方を相互に転換するアクティビティを介して生起する。それは、世界やまちと生の意味を紡ぎだす意味生成的・文化形成的な行為として、私達を励起せしめようとしているかのようである。



写真1 旧通信省東京無線局検見川送信所本館



写真2 千葉市栄町商店街



写真3 「i55/e200」田甫律子（アートプロジェクト検見川送信所2000）



写真4 座談会「町の記憶」（アートプロジェクト検見川送信所2000）



写真5 大学連携シンポジウム（アートプロジェクト検見川送信所2000）



写真6 「検見川小学生のダンス」南村千里（アートプロジェクト検見川送信所2001）



写真7 「検見川の色は何色？」中村正人（アートプロジェクト検見川送信所2001）



写真8 「たまり場」（アートプロジェクト検見川送信所2002）

大学と地域の連携の要となるアート

「都市の空気は自由にする」と言われた都市の中に大学は生まれた。ヨーロッパの古い諸都市を訪れたことのある人は、大学が教会と同じように都市の中で呼吸していることを目の当たりにした経験を持つだろう。ヨーロッパを手本として作り出されてきた日本の大学ではあったが、そのような「呼吸」を長く欠いてきた。

1960年代末の大学で起こった種々の運動は、それを変えようとする試みははらみつつも、文化改編に実らせることなく、高度経済成長の流れに組み込まれていった。その後の大学像の変容の中で、社会との関係において浮かび上がってきたのが、「産官学共同」と「地域に開かれた大学」という二つの方向での大学と社会の結びつきを強める動きである。

企業や行政等と積極的に提携し、社会的に存在が認められる大学となろうとするだけでなく、大学は「塀」を越えて、地域の人々と共同して様々な課題に取り組む姿勢を強く打ち出すに至った。このような中で一気に普及したのが、学生の主導性を強めた形態で、地域の諸課題に取り組む様々なプロジェクト的授業やゼミ・研究室単位等の活動の展開である。

東京近辺に限っても東京藝術大学の取手アートプロジェクト、慶應義塾大学の向島・京島プロジェクト、東京大学の国分寺市との連携プロジェクトをはじめ、

横浜市立大学、文教大学、武蔵野美術大学、早稲田大学などの各種プロジェクトがすぐ想起されよう。そこに名を連ねるのは、美術諸科の他、経営学、社会学、建築学、教育学、福祉学等多様である。

アートにかかわるプロジェクトは、この動きの中の多様な動きの一つとして位置付けられる。しかし同時に、アートはそれら多様な動きの中でも特別な位置を占める。と言うのは、一方で、まちづくり、福祉、教育など、取り組む相面のいかに関わらず、その多くで、アートの性格を持つワークショップが重要な役割を果たしているからである。他方、逆にアートを主要に意識したプロジェクトにおいては、しばしばアート外の様々な社会的諸課題への自覚的な関わりが組み込まれているからである。こうして、大学と地域の連携という課題にとって、アートはいわばその要とも言える位置を占めつつあると言える。

学生主導のアートプロジェクト

2000年、千葉市に千葉大の学生達が主導するアートプロジェクトが始まった。学生達が中心的な役割を担うアートプロジェクトの先駆けの一つであり、プロジェクトの継続期間も比較的長期的なものとなった。それは千葉大学「文化をつくる」受講生と芸術学研究所所属院生達によって主導的に担われてきたプロジェクトで、幾段階かの変遷をたどりながら展開されてきた。



写真9 「Vegetable Weapon」小沢剛 (WiCAN2003)



写真10 「中学芸員」奮闘中 (WiCAN2003)

アートプロジェクトの基本的性格となるファクターが準備期に用意された。大学改革の大きな動きの中で、独自の改革の延長上にプロジェクトが準備されていったということである。そして、アートや美術を必ずしも専門としない学生を受講対象とする「文化をつくる」というオムニバス形式の授業を組織し、そこからプロジェクトへと飛躍した。

アートプロジェクト検見川送信所

プロジェクトは、千葉市検見川の旧通信省東京無線局検見川送信所跡とその近隣の検見川商店街に展開されることとなった。検見川送信所は、1926年に吉田鉄郎も関わる通信省の建築家グループによって設計された表現主義建築の色彩濃厚な近代建築で、戦時中には南方に向かう船舶に向けた通信が行われるなど、近代建築・近代化遺産・近代産業遺産・戦争遺跡等の観点から重要な意味を持つ貴重な文化資源であった。しかし、千葉市はそれを取り壊すことを議会決定していた。

他方、検見川の旧街道筋の商店街と家並みは、零細ではあるが活気に満ちた漁業の町として、また周辺農業地域の人々の集まる市の町としてもにぎわっていた。昭和30年代に東京湾埋め立てのために漁業権が放棄された後、かつての浜沿いの街道筋は「時の忘れ物」のように高齢化が進み、シャッター街化も目立っていた。しかし、商店街の若旦那衆が集まり、地域振興の取り組みを始めたところでもあった。そして、町内会や公民館とのつながりなどが学生達の熱意によって一つずつ作り出されていった。

招待アーティスト田浦律子と佐藤時啓のもとで、プロジェクト内容も具体化していく。大学の一授業へ企業が助成する前例がない中、トヨタ、資生堂、アサヒビール、フィランソロフィー協会等から資金の提供を受け、NHK『日曜美術館』での紹介を含め千葉放送局の取材を受けるなどして、プロジェクトは次第に強固に支えられるようになった。

こうして、実現したアートプロジェクト検見川送信所は、①アーティストによるアートイベント、②学生達



写真11 「佐倉新町show店街」藤原靖子 (WiCAN2004)



写真12 「みんなでドーム in 大やぶ池谷津」磯崎道佳 (WiCAN2005)

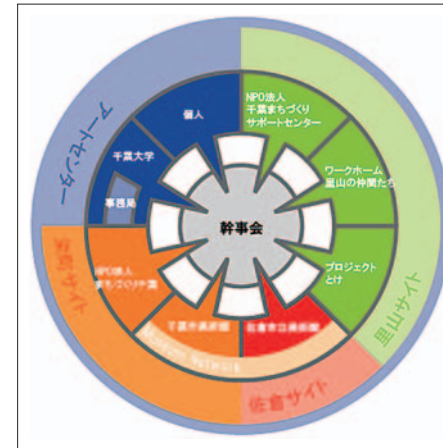


図1 WiCAN2005 時点の組織図



写真13 アートセンターに向けたリノベーション (池田修)



写真14 アートセンター Wi-CANP 入口

主導でまちの人々をつなぎ、まちと送信所・人々と海の記憶をつなぐところに成立するアートプロジェクト、③プロジェクトを実現するための過程が、参加する学生達や町の人々自身をアーティスティックな営みの中に誘うアートの性格を帯びる、④大学の授業としてはかつてない性格のもの、⑤この授業を通して大学と地域が深く相互に結びつく一つの可能性を示す、という特徴や成果を確認できるものとなった。

さらに翌年は中村正人、南村千里、川俣正らを招き、3年目の2002年には間島領一、藤浩志を招いて、開催場所も送信所から検見川の古い町並みへと移動させ、年を追うごとにまちの中のプロジェクトという性格を強めていった。

しかし、このプロジェクトは一旦2002年で取りやめることとなった。それは、反感を持った複数の方からの非難が町内会役員、大学学長、市役所等に繰り返されたこと、熱心に参加する個人や集団間の古くからの対立や反目が、微妙に表面化したこと、安定した経済的見通しが得られなかったことによる。

千葉アートネットワーク・プロジェクト WiCAN

検見川プロジェクトの限界を乗り越えるべく、①学生が落下傘で降り立ち、それをまちの人々が応援するだけという構造から脱却し、まちや地域等の人々自身が自らのプロジェクトとして意識できるものとする、②その様な協同によって、プロジェクト遂行のための最低限の経済的基盤を確保する、③千葉の新しい文化形態の創出につながるために、プロジェクトを多様で広範な人々のネットワークに支えられたものとする、④ネットワークで提携する諸団体等の一つ一つが、必ずしもアートを目指さず、例えば医療であったりまちづくりであったり、福祉であっても、

諸団体等が望む限りは協同し、それらに関わりながらそこにアートの次元を開くことを共有する、ことが探られた。

その結果、各方面と打診が行われ、2003年には新しいプロジェクトを支える「母体」が形成された。この母体とは千葉市美術館、NPO千葉まちづくりサポートセンター、NPOまちづくり千葉、千葉市障害者通所施設であるワークホーム・里山の仲間たち、そして自治体職員や元新聞記者など諸個人である。こうして、千葉大学の芸術学研究室と「文化をつくる」を起点として始められたプロジェクトは、千葉の各方面の人々や団体のネットワークによるプロジェクトへと発展し、受け継がれることになった。この「千葉アートネットワーク・プロジェクト」は、英語で Work in Chiba Art Network=Project、略して WiCAN プロジェクトとした。

WiCANプロジェクトは、私から後任の千葉大学神野真吾准教授にバトンタッチされ、第2期を迎えている。2008年には組織と性格を改め、質の高いプロジェクトとして、千葉市で着実に根を張るに至っている。

大学と地域が連携する次の段階へ

今や全国随所に、大学関わったアートプロジェクトが展開され、大学と地域が連携する各種の企画も進められている。時代は次の段階に進もうとしていると言ってもよいであろう。それは、交わった諸力が、例えば「クリエイティビティ」の理念等にも関わって、より大きなシステムを見据えた提携を、より深く、より水準高く展開する条件を開くということでもありうかと思われる。

移動した先の首都大学東京で、学生および同僚教員達と、東京都多摩地区の人々や条件のもとで、その試みを開始したところである。